

## 記紀歌謡に歌われたもの (二)

—植物を中心に— (中)

岡 田 喜久男

前稿で、記紀歌謡の中に歌われた植物と植物関係の語句を全て挙げ、その記紀歌謡及び古代文学における意味を考察し始めた。本稿もそれを享けて、一つ一つの植物関係語彙の実体を文学的に考えてみたい。

(尚算用数は「古事記」の、漢数字は「日本書紀」の歌謡番号で、いずれも『古代歌謡集』日本古典文学大系の歌謡番号に拠った。)

(9) 白樺<sup>かし</sup>31 (久麻加志賀波衰) 48 (加志能布邇) 91 (波毘呂久麻加斯) 92 (伊都加斯賀母登 加期賀母登 加志波良衰登元) 三九 徧辞能輔理)

以上、六首中に七例の白樺が謡われていて、全植物中最も多く登場するのであるが、その歌われ方も、熊白樺、葉広熊白樺、蔽白樺、白樺と多様である。「熊」は「八尋熊罴」(『日本書紀』)「概久万波自如弥」(『新撰字鏡』)「角鷹久万太加」(『和名抄』)などの例からみて、動植物の大きい事、強い事を意味する接頭語であるが、「葉広」「蔽」も同様の称辞である。白樺は木質が堅く(その名も、カタシ、カタギから来たと言われ、和字「樫」もここから作られたものである)

記紀歌謡に歌われたもの (二) —植物を中心に— (中)

直立し、建築用、祭祀用に用いられた。そして何よりも、人皇第一代の神武天皇は、「観れば、夫の歌傍山の東南の檀原の地は、蓋し国の塊<sup>かたまり</sup>区<sup>くわ</sup>か。治<sup>さ</sup>るべし。」(『日本書紀』神武即位前紀)とおっしゃって、檀原宮を作り、即位されたのであるが、そこはまさしく白樺の生であった。又近くに甘檀丘(地名の由来としてはアマガセ(曲瀬)説が一般的)もあり、飛鳥の地に白樺が自生し、人々の生活に根付いていたことが、発掘の成果からも裏付けられている。

31の歌は、体が弱り望郷の念を興した倭建命が能煩野(鈴鹿市近郊)で歌ったもので、生命力に溢れた白樺を髻花(頭髮や冠に挿す飾り)として頭に付け、感染呪術を行ない人生を謳歌せよ、という意味であろう。植物を身に付ける例としては『出雲風土記』(大原郡佐世郷)に

古老の伝へていへらく、須佐能衰命、佐世の木の葉を頭刺して、踊躍らしし時、刺せる佐世の木の葉、地に墮ちき。故佐世といふ。

とあったり、『皇太神宮年中行事』所載「六月十六日御饌祭桜宮大和舞歌」に

宮人の 挿せる榊を 我挿して 萬代よろづよまでに 奏かなで遊あそばむ  
などが挙げられるが、いずれも植物の端々しい生命力を得たいと願うもので、人間の命のはかなさに対する嘆きを感じられる。

48の歌の「白樺の生」という例は、「粟生」(11)「茅生」(万・三〇五七)「麻生」(万・三〇四九)などが示すように、生ひ繁つてい  
る所の意であり、場所は現在の奈良県吉野郡吉野町榎尾の地だとさ  
れている。吉野の国主が、「口鼓を撃ち、伎を為して」歌つたもので、  
『古代歌謡全注釈古事記編』土橋寛が、「白樺の生に 横白を作り」に  
ついて、

その横白で酒を醸すのであるが、この句は榎の木で白を作る  
意で、榎の材質が醸酒によい、というようなことがあつたかも  
しれない。

と言うように、榎を特に選んだ理由があつたのではないかと思われ  
る。  
92の歌には、三回も白樺(人名も汎稱であり、『古事記伝』の「蔽  
白樺に譬へて、其が如くなる媛女と云意」に拠る)が登場するが、  
独立した歌謡と見た場合「白樺原嬢子」は巫女を、「蔽白樺」は神  
域の神木を意味するのでは、とする土橋氏の説(前掲書)が良いと  
思う。

然し『古事記』本文の通り、老女引田部赤猪子を白樺原嬢子と呼  
んだ、としても「蔽白樺」から「忌々し」を導き出すことが出来る  
のは、白樺の霊聖を考える他はない。

(10) 香葎かま11(賀美良比登母登) 十三(介瀾羅毗苔茂苔)

11の歌は(十三も同様)、神武記歌謡の中でも、大和平定物語に

挿入された六首の久米歌の一首であるが、久米氏が頼田兵的戦闘集  
団であつたから、六首には、鳴鶯しぎわな、立孤梭たちそ、檜いんぎ、粟生他あふみ、食用  
の動植物が数多く詠み込まれている。香葎は『延喜式』内膳の「供  
奉雜菜」に「葎二把」とあつたり、『和名抄』に、

本草云 葎古美良味辛酸温無毒者也。崔禹錫食經云 葎食之  
除病、

とあるなど食用、薬用に供されたことが分る。

ただし、歌の世界では『万葉集』東歌に

344 伎波都久の岡の茎葎くみらわれ摘めど籠にも満たなふ背みなと摘まさね  
の一首が見出されるだけである。11の歌は、

みつみつし 久米の子らが 粟生には 香葎一本 其ねが本  
其根芽つなぎて 撃ちてし止まむ

とあつて、神武天皇軍に激しく抵抗し、皇兄五瀬命を死に至らしめ  
た、登美毘古(長髓彦)を撃つ決意が歌われているが、根こそぎ征  
伐する様子を「葎の根と芽を一緒に引き抜くように」と比喻するの  
は戦闘の重大性と比較する時、笑いに連つて思うように思われる。

(12) 葛百二八(麻矩儒播羅)

葛は、今日でも根から葛粉を取り食用にするが、古代ではその他  
葛布を作つて着ていたことが、『万葉集』の

136 女郎花生ふる沢辺の真田まき葛原何時かも絡りてわが衣きぬに著む

などによつて分る。(百二八)の歌は『日本書紀』天智紀にある、  
書紀歌謡最後の歌で、童謡三首の「其の三」にあたる歌である、

赤駒あかこまの い行き憚る 真葛原 何の伝言つてこと 直しし良よけむ其の三  
と、葛の生え茂る野原は馬が行き悩む、そのように他人に憚つて第

三者に伝言してもらうのは何故かと続けている。この歌については『記紀歌謡評釈』山路平四郎が『万葉集』御歌と同歌であることを指摘した後で

恋の謠物で当の本人は来ず、使ばかりよこして、足の遠くなつた夫を、通い棲む道に、馬のおれぬ真葛原があるわけでもあ  
るまいし、とにかく御自分で来てお話なさいと、妻がなじつた歌であらう。

と説くのが当を得ていると思う。

葛は生命力が強く、どこでもどこまでも延い伸びるところが、古人の心に止つたと見えて、『万葉集』で葛を詠み込んだ十八首の中、『延ふ葛の』が五首、『真葛はふ』が三首に見出せる。書紀の歌謡もこの葛の強韌な蔓性の茎に注目しての歌詞である。

(13) 桑五六(于羅遇破能紀 于羅患破能紀)

今日でも桑は養蚕の為に欠かすことの出来ない植物であるが、貴重な絹を得る為のものとして、古代でも栽培されていた。「雄略紀」六年三月の条に

天皇、后妃をして、親ら桑こかしめて、蠶こがの事を勤めむと欲ほす。とあるように、桑の葉は養蚕に、実は食用に、幹は器具の用材として重宝がられた。五六の歌は、嫉妬の為に仁徳天皇を避けている皇后(磐之媛)を迎えに行く仁徳天皇の船の前を、桑の木が流れた時の作である。その歌詞に「磐之媛が おほろかに 聞さぬ 末桑の木」とあるのは、「雄略紀」と同様、中国の農業関係の祭祀に皇妃が関与したことを我国に移したものと思われるが(『漢書』元后伝他)、桑の木を、大事にした(おほろかに 聞さぬ)ことは明か

ある。「古事記」の「仁徳記」では、仁徳天皇に太后を訪れさせる為に「三色に変わる奇しき虫」即ち蚕を利用する話があつて、仁徳天皇と養蚕の関係が深いことを思わせる。

(14) 栗4243(美都具理能) 93(和加久流須婆良) 三五(瀨菟遇利能) 栗が古代人の、就中子供の好物であつたことは、『万葉集』巻五山上憶良の「子等を思ふ歌」

802 瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして俵はゆ いづくより 来りしものぞ まなかひに もとなかりて 安寐し寝さぬ でありにも有名である。然し、『万葉集』四千五百余首の中で、栗は右の憶良の他二首に、しかも「三栗の 中に」(1745)「三栗の 中ゆ」(1738)としか歌われていない。

それに対して、記紀歌謡二百四十首の中の四首に栗が歌われていることは注目し値する。三首は「三栗の」の枕詞で、「中」にかかる用例であるし、93歌は、

引田引たの 若栗わか栗原 若くへに 率寝てましもの 老いにけるかもと、若木の栗の生えている林から「若い時」へと続いている。古代から諸々に栗林が存在したことは、地名として『和名抄』だけではなく山城国久世郡に「殖栗、栗隈久末 羽栗」。

陸奥国に「栗原久末」。越後国頸城郡に「栗原波良」。播磨国揖保郡に「栗栖久末」

などが見出されることから明かである。平安朝における「栗」は「蘇甘栗の御使」に見られるように、縁起のよい物となり、中世の搦栗などに連なるのであるが、古代では、栗は第一に食用、第二に幹や枝は建築用器具材、第三に樹皮が染料となつた。記紀歌謡に用

例が多いのも当然である。

(15) 薦80 (加理許母能)

薦を刈ることは、『播磨風土記』(飭磨郡)に

昔此川生<sup>レ</sup>蔭、干時賀毛郡長畝村人到来<sup>レ</sup>蔭 爾時 此處  
石作連等 爲<sup>レ</sup>奪相闘：

とあるように、多くの人々が体験した仕事であった。というのは、薦が、その若芽と実が食用に、莖や葉は編んで蓆を作る材料となつたからである。事実、『万葉集』では二十二首の中に薦が詠まれて

いる。  
80の歌は、木梨軽太子が同母妹に奸<sup>なほ</sup>けて、その決意を歌つたもの

で  
愛<sup>うは</sup>しと さ寝しと寝てば 刈薦の 乱れば乱れ さ寝しと寝  
てば

とあつて、刈つた薦が乱れやすいことから、男女の仲が乱れる(離れ離れになる等)ことへと転換させている。植物の乱れることから人事へ転ずる例は『万葉集』に

376 草枕旅にし居れば刈薦の擾<sup>みだれ</sup>て妹に恋ひぬ日はなし

など「麻」や「青柳」によく見られる定型的表現と言えよう。然し、軽太子の「乱れ」は、皇位継承権の喪失を覚悟しての言葉であるだけに「事実『古事記』本文は、この後「是を以ちて百の官及天の下の人等、軽太子に背きて穴穂御子に帰<sup>よ</sup>りき」と続く―日常生活での体験による「刈り薦の乱れ」が天下の一大事へと連なる面白さが白眉である。

(16) 桜六七 (佐區羅能梅涅)

桜は、平安朝以降、花と言えれば桜を意味すると言われる位、日本を代表する花木として有名であるが、記紀歌謡では六七の歌一首である。『万葉集』には四十首に詠まれているのであるから記紀歌謡の一首は不思議な少なさである。事実『古事記』全体では桜の字を含む人名が六例「桜井臣」他があるが、実際の花木としての桜は一例もない。『日本書紀』には三十三の「桜」の字が出ているが殆んど、人名や宮、屯倉、寺の名前であつて、実際の桜の木や花と思われるものは、履中天皇の皇居、「磐余稚桜宮」の宮の名の起源説話にある「膳臣余磯酒 献<sup>たま</sup>る。時に桜の花、御蓋に落<sup>おち</sup>れり。」とあるのと、六七の歌の前文の僅かに計二例だけである。この宮の名の起源説話も実景としては危いので、記紀ともに桜が鑑賞や感動の対称とされていない憾がある。

この六七の歌は、允恭天皇が、衣通郎姫と一夜を過<sup>すご</sup>し、その感激を歌われたものである。

明<sup>あきら</sup>旦<sup>した</sup>に、天皇、井の傍<sup>ほとり</sup>の桜の華<sup>はな</sup>を見<sup>み</sup>して歌ひたまひし<sup>く</sup>  
花<sup>はな</sup>ぐはし 桜<sup>あけ</sup>の愛<sup>め</sup>で こと愛<sup>め</sup>てば 早<sup>み</sup>くは愛<sup>め</sup>せず わが愛<sup>め</sup>ずる

子ら

皇后聞こしめして、且<sup>また</sup>大きに恨<sup>にく</sup>みたまふ。

後朝の感動を歌つたものとしても、「同じ愛するなら、もっと早くから愛すれば良かったのに」と、甚だ率直かつ適切であるが、「花の美しい桜、その桜を賞美することよ、桜ならぬ衣通郎姫を」と歌うところは、律動的で美しい。もしこの一首がなかったら、と思わ

せる作であるが、女性の美しさを桜の花の盛りに喩えているところが、直接桜を讃えたものではないにしても、桜の美しさを充分伝えてくれると思う。その意味では珍しい歌である。

(17) 笹 79 (佐佐婆爾)

笹は『万葉集』に「小竹」133とあるように、小さな竹の総称で、語源として『大言海』は

細小竹<sup>ササタケ</sup>の下略、或<sup>ハユラ</sup>、葉ノ風ニ吹カレテ相触ルル音ヲ名トシ、竹ノ異名トシタルナリト

と二説を挙げているが、前者の説に心魅かれるものの、後者も充分考慮に値する。と言うのは、神楽の囃詞に「佐佐」が使われ、『万葉集』の歌にも

431 佐左が葉のさやく霜夜に：

133 小竹の葉はみ山もさやにさやげども：

など音に関して「笹」が歌われている例が見出されるからである。

ところで『増訂萬葉集植物新考』松田修（以下「植物新考」と略記する）が指摘している点、即ち『万葉集』の「ささ」の歌五百首<sup>(2337)(2338)(431)</sup>を挙げて、

以上の歌をみると、いずれも、みな霜の降る夜のササの葉やはだれ降り覆ふササの葉がよまれて、寒夜の恋の思いをそれに表象している。

と言うのであるが、79の歌もまさしくその通りの歌である。この歌は、先に挙げた80の歌と同じく「木梨軽太子と軽太郎女の物語」の一首で、

笹葉に 打つや霰の たしだしに 率寝てむ後は 人は離ゆと

記紀歌謡に歌われたもの (二) — 植物を中心に — (中)

も

と、霰が笹に降りしきり、タシダシと音が響くことから「確かにしつかりと」共寝した後は云々と展開している。霰の降ってくる音は、今日でも、それと分る程激しく唐突であるが、古代でも『万葉集』の「あられふり」が、カシマシから鹿島にかかる枕詞であることから分るように、霰の音は注目されていた。笹と霰の取り合せは、『播磨風土記』賀毛郡小目野の条にある歌

愛くしき 小目の小竹葉に 霰ふり 霜ふるとも  
な枯れそね 小目の小竹葉

とあるし、「小竹葉」は、『古事記』天岩屋戸の場面で、天照大御神の隠つていた岩屋の前で踊った天宇受売命が手に持ったのが「天の香山の小竹葉」であった。これは「神楽歌」の「採物」の「篠」

この篠は いづこの篠ぞ 天に坐す 豊岡姫の 宮の御篠ぞ  
に受け継がれ、後世の神事でも笹がよく使用される。

(18) 烏草樹 57 (佐斯夫袁 佐斯夫能紀)

烏草樹は『和名抄』に「揚子漢語抄云、烏草樹、佐之夫乃樹」とあり「古事記伝」には「此樹契沖云、今山里人はさせほの木と云ひ、<sup>ひまき</sup>椛に似て小さき実あり。熟すれば紫の黒みたるやうにて、童などは取り食ふとぞ承る」とある。『植物文学研究』古典の花」松田修によれば、

さしぶ (烏草樹) ツツジ科

サシブは「和名抄」、「新撰字鏡」共にシヤシヤンボの名とし、サセブ、サセブノキの名は今も甌島に残っている。シヤシヤンボはサザンボすなわち小小ん坊の意味で、実が丸く小さいこと

によるもので、サシブも同じ意味である。漢名南天燭、この名「出雲風土記」に出ている。わが国では中部以西の低地の林に多い常緑低木あるいは高木で、初夏長鐘形の白色の花を下垂し、実は球形で食べられる。

とあるように、実を食べたりもする比較的小さな木である。

57の歌は、仁徳天皇皇后の「石之日売の嫉妬物語」中の歌で、天皇が八田若郎女を寵愛していることを知って、山代川（今の木津川）を上りながら皇后が歌ったものである。

：川の辺に 生ひ立てる 烏草樹を 烏草樹の木 其が下に  
生ひ立てる 葉広 齋つ真椿 其が花の 照り坐し 其が葉の  
広り坐すは 大君ろかも

と、「烏草樹を 烏草樹の木」という呪言めいた反復から主たる呪的植物である椿へと展開している。その二つの景物の関係について、

『古代歌謡全注釈古事記編』土橋寛は

それならば「川の辺に生ひ立てる 葉広真椿」とすれば済むものを、どうしてその間にもう一つ「烏草樹の木」を入れたのかということ、「川の辺」と「葉広齋つ真椿」との取り合わせが不似合いと考えたからであつて、そのために川べに多く見られかつ呪的な花をつける烏草樹を、クッションとして置いたのであろう。景物を二つ重ねて提示する方法は、こういう事情によるものであり、寿歌のパターンが守られさえすれば、烏草樹の「下に」椿が生えているという現実的な不自然さなどは、少し問題ではなかつたのである。

と説いている。

(19) 小竹35 (阿佐土怒波良)

亡くなった倭建命の魂は、八尋白智鳥と化つて飛んだ。后と御子等はその後を追つた。

其の小竹の荻杖に足踏破るれども、其の痛きをも忘れて、哭か  
しつ追ひいでましき。此の時に歌ひたまひしく  
浅小竹原 腰泥む 空は行かず 足よ行くな

と『古事記』は記している。小竹の切株に傷だらけになって、篠の原に腰を取られて泣きながら追いかける様子は、『古事記』の文学性と無関係ではない。ところで、「しの」は『古事記』では「小竹」、『日本書紀』「神功皇后撰政元年二月」では「小竹宮小竹此」とある。『万葉集』では「細竹」「小竹」とあるように、

竹の、小さく細くむらがつて生えるものの総称。ねざさの類を  
主としていうか。(時代別 国語大辞典 上代編)

が穏当な説であると思う。腰にまつわりつく小竹に難渋する体験は、古代人にとっては普通の事であつた筈で、その日常性が、倭建命の御葬の歌となり、更には「故、今に至るまで其の歌は、天皇の大御葬に歌ふなり。」というように重要な歌となつた。

(20) 椎42 (志比斯那須)

42の歌で応神天皇は、乙女の歯並(歯)が「椎菱なす」(椎の実や菱の実のように白い)と歌っている。椎は今日でも食べているが、『延喜式』巻七踐祚大嘗祭の大嘗宮の項に

将柴為垣。押二梓八重垣末。挿将椎枝古語所謂志比乃和患

とあるように、又「風土記」にも屢々登場するように普通に見られるものであつた。『枕草子』にも「似げなきもの、髭がちなる男の

椎藪みたる」とある。ところで応神天皇は、美女・宮主矢河枝比売の美しさを、後姿、齒、眉と具体的に挙げているのであるが、その注目点が他にあまり例のないものである。美女を表現することである有名な万葉の歌人、高橋虫麻呂は、「周淮の珠名」の美しさを胸別の「広き我妹 腰細の すがる娘子」1738と「豊かな胸と細い腰」で描写したが、その近代的な美女表現に対して、応神天皇の場合

後方(後姿)を小楯で(『古事記伝』の「いささかも屈みわろびれたることなくして、楯を立てたる如く 平かに直きを見送坐て賞美賜へる也」の解釈がよいと思う)、齒を椎や菱の實の白さで、眉を色のいい土で弓形に描くと歌っている。ここでも、身近なもの、小さな物で描写する古代歌謡の特徴がよく出ていると思う。尚、「椎菱なす」を『稷威言別』橘守部は本文を如椎として「其、齒並は、椎の實を並べたるさまにして」と文字通り齒並びのこととしているが、椎はまだしも、菱の形状を齒に喩えるのはいかがであろうか。どちらも實の白さを導くとするのが隠当であろう。

(21) 白檀二三(志邇伽之鐵延鳩)

白檀は、赤檀に対する名で、その材質が白いことからきている。二三の歌では「白檀が枝を」となっているが、先に述べたように、類歌である31の歌では「熊白檀が葉を」とあり若干相違する。古代で「白」「白」を名詞の上に付けて複合語を作る例は、白雲、白露、白妙、白酒他多く、記紀歌謡にも「白腕」「白妙」「鯨白玉」があつて、「しろ」に清浄、神聖の意識を見ることが出来る。また「枕草子」に「花の木ならぬは」の段で

記紀歌謡に歌われたもの(二) — 植物を中心に — (中)

白檀といふものは、まいて深山木のなかにもいとけどほくて、三位・二位のうへのきぬ染むるをりばかりこそ、葉をだに人の見るめれば、をかしきこと、めでたきことにとりいでつべくもあらねど、いづくともなく雪のふりおきたるに見まがへられ、素盞鳴尊出雲の国におはしける御ことを思ひて、人丸がよみたる歌など思ふに、いみじくあはれなり。

とあるように、現物は平安貴族にとつて殆んど知られなくなつたが、染料としては知られていたようである。

(22) 菅19(須賀多多美) 64(須賀波良) 菅64 65(比登母登須宜汲)

64(須宜波良)

「すが」は「すげ」の交替形であるらしく、常に複合語の中で見出せない。記紀歌謡の中でも、19菅畳64菅原とその例に違はない。菅は群落をなし、細く1m内外もあるので、古来笠や畳の材料となつた。19の歌は、神武天皇が伊須氣余理比売と一夜明したことを思い出して歌つたものである。

葦原の 密しき小屋に 菅畳 いやさや敷きて 我が二人寝し 結婚の儀式には畳を必要としたようで、『古事記』によれば火遠理命(山幸彦)が海神の娘・豊玉毘売と結婚した時「美智の皮(アシカ)の皮」の畳八重を敷き、亦純畳八重を其の上に敷き」とあるし、やはり海神への花嫁として自ら走水の海に入った倭建命の後(倭建命には天皇に准じた文字が用いられている)弟橘比売命は、「海に入りたまはむとする時に、菅畳八重、皮畳八重、純畳八重を波の上に敷きて、其の上に下り坐しき」とある。このように神話の中に

も菅量が出てくるのであるが、19の歌は、菅量から、いやさや敷きてへの続き方が巧みである。「すが」の語源として『夏山雑談』平直方などは「清浄なることを古語にすがと云。…菅をすがと云ふも潔白なる故なり」と言うのであるが、恐らく古代にも「菅量」の語感として「すがすがし」と近く感じていたのであろうし、量の清らかさとその音から「いやさや」が呼び興されたのである。八千矛神（大國主神）を引き止めようとして酒杯を持つて歌った須勢理比売命の歌謡にも、「袴衾 さやぐが下に」と、夜具がサヤサヤと鳴る様子が官能的に歌われている。64の歌は、仁徳天皇が、大后石之日壳の嫉妬により別れさせられた八田若郎女を恋しく思つての歌で、

八田の 一本菅は 子持たず 立ちか荒れなむ あたら菅原  
言をこそ 菅原といはめ あたら清し女

65の歌は、それに答えた八田若郎女の歌で

八田の 一本菅は 独り居りとも 大君し よしと聞さば 独り居りとも

とある。「一本菅」とは、群生する菅が一本だけで生えている状態から、子を持たない女性を表わしている。同様な表現に4の歌の、「山處の 一本薄」があるが、「八田」の地名からの続きで八田若郎女へ行くのがより直接的で、強い恋の思いが素直に伝わつて来る。作者が仁徳天皇であるとする物語から離れて見れば、『古代歌謡全注釈古事記編』が、色々な誘い歌の例を挙げて、

以上のことを頭に置いて見るならば「八田の一本菅」の歌が、歌垣における誘い歌であることは明らかであろう。せつかく美

しい女だのに、いつまでも独り身で、子も持たず、娘盛りを過ごしてしまふとは、もつたないことだ、というので、それを若者の気持のほうから歌つたのが、東歌の「ま屢にも得難き縁を置きや枯らさむ」の歌である。

と結論ずけているのが、八田若郎女の答え歌を考慮に入れると、一番説得力のある説である。なお「菅原」の「原」は軽く添えたもので、「清し女」と続ける為に出されたものであろう。

(23) 薄 4 (比登母登須須岐)

薄は『時代別国語大辞典上代篇』に「薦・荻」(名) すすき。ほもの科の大型多年生草本。その形状から、ハタススキ・ハナススキなどの称もある。秋の七草の一。葦・荻などを総括していることもある。カヤ・マクサ・ミクサ・ヲバナとも。」というようにまた、『万葉集』を見ても、ススキ・ヲバナ・カヤの名で四十六首の歌(『植物新考』による)があるように、古代から人々の身近にあり、よく歌われた植物である。その理由は、広く分布しているし、屋根を葺く材料と為つたから、又その花穂が動物の尻尾に似ているところから尾花と呼ばれ、形の面白さが賞でられたからである。

4の歌は、八千矛神(大國主神)が、嫉妬深い、嫡后須勢理比売に閉口して、出雲から大和へ行くこうとして馬に乗る時歌つたものである。その中で、夫に去られて涙に眩れる妻の様子を

いとこやの 妹の命 群鳥の 我が群れ往なば 引け鳥の  
我が引け往なば 泣かじとは 汝は云ふとも 山處の 一本薄  
項傾 汝が泣かさまく 朝雨の 霧に立たむぞ 若草の 妻  
の命 事の語り言も こをば

と歌い掛けたのであるが、記紀歌謡の中で最も適確で美しい描写ではないか、と思われるのが「山處の一本薄 項傾し 汝が泣かさまく 朝雨の霧に立たむぞ」の部分である。夫に去られた妻の俯いて泣く姿が、重い花穂で頭を垂れた一本の薄で喩えられているのは、単なる比喩の域を越えていると言えよう。「枕草子」にも「草の花は」の段で

これに薄を入れぬ、いみじうあやしと人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは薄こそあれ。穂さきの蘇枋すぢにいと濃きが、朝霧にぬれてうちなびきたるは、さばかりの物やはある。

…冬の末まで、かしらのいとしろくおほどれたるも知らず、むかし思い出顔に、風になびきてかひろぎ立てる。人にこそいみじう似たれ。よそふる心ありて、それをしもこそ、あはれと思ふべけれ。

と、朝霧にぬれなびく薄、昔しを思い出す風情の薄、人にたとえられる薄、と八千矛神の歌と同じ点が指摘されているのも、人々の薄に対する観察が行き届いていた証拠であろう。

②4 芹百二六(制。能母騰)

沼沢や溝などに茂る芹は、今日でも春の七草としてその佳香が喜ばれ食されるのであるが、古代でも『出雲風土記』意宇郡「津間抜の池 周二里めづり冊歩まどなりかた覺・鴨・芹菜せりあり」や『万葉集』

445 あかねさす昼は田賜たかりびてぬばたまの夜のいとまに摘める芹これ  
456 ますらをと思へるものを大刀佩きてかにはの田居に芹ぞ摘みける  
に「摘める」とあることから、食用とされたことが分る。百二六

の歌は、天智十年十二月、天皇崩御の時の童謡わらわしたの三首の中の一首である。

み吉野の 吉野の鮎 鮎こそは 鳥傍しまへも良よき え苦しなゑ 水葱なぎ  
の下 芹の下 吾はえ苦しなゑ 其の一

恐らく、一年後に起こる壬申の乱に関する童謡とする諸注釈の説が当たっているであろう。中でも名著『吉野の鮎』高木市之助が「吉野に通れ入り給うた御心境に対する、時人の同情」と解し、『古代歌謡全注釈日本書紀編』は

したがってこの歌は当時の民衆が大海人皇子に同情を寄せていたことを示すものではなく、『書紀』の述作者が、この歌によって当時の民衆が大海人皇子に同情を寄せていたように書いているにすぎない。

と説く。作者観の違いはあるが、吉野入りをした大海人皇子に対する同情の歌という点では一致している。鮎が清流を泳ぎまわる自由さと、泥だらけで、水葱や芹の根もとに逼塞する私とが対称的に歌われているが、「ナギ」と「セリ」が何故歌われているかについては『記紀歌謡評釈』山路平四郎が、

あるいは、「水葱のもと 芹のもと」には、和(ナギ)競(セリ)の両論の渦中にあつた大海人皇子の立場を諷刺したものと  
する考えがあつたかも知れない。

と新説を出している。セリの名の由来として『古今要覧稿』が  
セリは俗にセリアフ セリダス セリアグル などの同じ意  
にて此草むらがりおひ出でつめども、跡よりきほひおふる物な  
るによりて名づく

とするのと合せると(『古今要覽稿』)の例は新しく、書物自体も近世末期成立ではあるが)「競り説」も興味深い。いずれにせよ、水葱や芹のもとを這い廻る苦しさは、芹の持つ爽やかな香気を思う時一層鮮やかに思い出されたのではなからうか。

(25) 楓稜<sup>ほ</sup>9 (多知曾婆能) 七(多智曾婆能)

楓稜は、『和名抄』に「唐韻云楓稜<sup>楓</sup>二音和木也又四方木也」とある。然し、楓と稜が、『古事記伝』に

字書を考ふるに、楓稜は木ノ名に非ず。木の椶<sup>むら</sup>なり。然るに此ノ字を曾婆<sup>ソバ</sup>の木に当たるは、物の稜<sup>かど</sup>角を曾婆<sup>ソバ</sup>といふから、思ひ混<sup>まが</sup>へたる誤りなり。

と云うように、四角や八角の角材を表わす文字であるところから、色々な説があつて、定説は無い。『古事記伝』は「未<sup>ミ</sup>慥<sup>タカ</sup>に考へ得ず」と言いながら、「かなめ」の名を挙げ、『稜威言別』は「錦木」説を、『古代歌謡全注釈<sup>日本書紀編</sup>』、『古事記全註釈』倉野憲司はともに、『日本人と植物』前川文夫の説を受け入れて「ブナノキ(ソバグリ)」であるとしている。『日本人と植物』「ソバという名の系譜」によれば

タチソバすなわちブナは果実<sup>ミ</sup>はたべられる。しかし小さい上に瘦せた三角錐状で、内部の肉は薄く(これは胚乳ではなくて子葉である。その点はクリと同じである)、いわばいかににも貧しい堅果である

とあつて成程9・7の歌にびつたりである。前稿の<sup>いちまき</sup>拾<sup>しよ</sup>の所で述べたように9・7の歌は類同歌で、神武天皇が宇陀の地<sup>えうた</sup>に兄<sup>あに</sup>宇迦斯<sup>か</sup>を討ち取った後の戦勝の宴の歌である。

宇陀の<sup>なご</sup>高城<sup>たか</sup>に 鴨<sup>い</sup>網<sup>な</sup>張<sup>り</sup>る 我が待<sup>まち</sup>つや 鴨<sup>い</sup>は障<sup>さ</sup>らず いすくはし 鯨<sup>くじら</sup>障<sup>さ</sup>る 前<sup>まへ</sup>妻<sup>つま</sup>が肴<sup>さかな</sup>乞<sup>ね</sup>はさば 立<sup>た</sup>楓<sup>か</sup>稜<sup>ら</sup>の 実<sup>み</sup>の無<sup>な</sup>けくを 扱<sup>あ</sup>きしひえぬ 後<sup>うしろ</sup>妻<sup>つま</sup>が肴<sup>さかな</sup>乞<sup>ね</sup>はさば 枳<sup>か</sup> 実<sup>み</sup>の多<sup>おほ</sup>けくを ……

と喜びに満ちた調子で歌われている。「前妻<sup>まへつま</sup>が肴<sup>さかな</sup>乞<sup>ね</sup>はさば 立<sup>た</sup>楓<sup>か</sup>稜<sup>ら</sup>の 実<sup>み</sup>の無<sup>な</sup>けくを」に対して「後妻<sup>うしろつま</sup>が肴<sup>さかな</sup>乞<sup>ね</sup>はさば 枳<sup>か</sup> 実<sup>み</sup>の多<sup>おほ</sup>けくを」とは何と大らかに露骨な物言いであるうか。枳<sup>か</sup>と同じように、「立<sup>た</sup>楓<sup>か</sup>稜<sup>ら</sup>の」は「実<sup>み</sup>の無<sup>な</sup>けくを」の枕詞の序詞であるが、植物の実の多少に注目して、「無いものをやれ」と言うのは(殆んど実の無いのが実情であつたにせよ)比喩的発想から一歩抜け出ているように思えるし、それだけに戦勝に酔う兵士の笑いを誘つたのであろう。

(26) 枳<sup>か</sup>35 (多久豆怒能) 5 (多久夫須麻)

枳<sup>か</sup>については『植物新考』が

さてこのタク、タへ、ユフであるが、これはコウソウの纖維あるいはこの纖維でつくつた布を指し、直接その植物を指しているものではなく、その語源も、タクは、皮をたたいて纖維をとるタクから起り、タへもこの皮をはぎとつて用とするタクから出たものである。紀州から四国にかけては今も絲をとるのを、「絲をタへ口」といふ。また、ユフはその織りなした布の名である。

と言うように、<sup>こ</sup>楮<sup>す</sup>の樹皮から作つたものなのに、タク<sup>た</sup>：枳<sup>か</sup>網<sup>な</sup>・枳<sup>か</sup>繩<sup>じゆ</sup>・枳<sup>か</sup>袷<sup>あは</sup>、ユフ<sup>ゆ</sup>：木<sup>き</sup>綿<sup>めん</sup>・木<sup>き</sup>綿<sup>めん</sup>・木<sup>き</sup>綿<sup>めん</sup>花<sup>はな</sup>タへ<sup>たへ</sup>：荒<sup>あ</sup>枳<sup>か</sup>・和<sup>わ</sup>枳<sup>か</sup>・白<sup>しろ</sup>枳<sup>か</sup>など、同じ材料を使つてもその用途、製品によつて言い換えたと思われる語が多く、『万葉集』にも「たく」とみえる歌十一首、

たへ とみえる歌百五首、ゆふ とみえる歌二十六首。」(「植物新考」と多数の歌に使用されている。ところで3・5の「栲綱」の用例は「万葉集」に480「栲角乃新羅」488「多久頭怒能之良比氣乃宇倍由」とあり、枕詞であることが明らかである。即ち、栲の繊維で作った綱が白いところから、腕・白髭、さらには新羅のシラにかかっているのである。

3の歌は、沼河比売が八千矛神(大国主神)の求婚の歌に答えたもので、比喩を多用し、情緒纏綿たる女歌で、

…朝日の 笑み栄え来て 栲綱の 白き腕 沫雪の 若やる  
胸を 素手抱き 手抱き拔がり 真玉手 玉手さし枕さし…

と最も官能的な部分に使われているのが、「栲綱の 白き腕」である。この歌の場合、その白い腕は、八千矛神のものであるとも思われるが、「稷威言別」に「男神の御手を指るなり」とある。「沫雪の 若やる胸」とともに沼河比売自身の描写とするのが穩当に思われる。5の歌は、先に薄の所で挙げた、4の八千矛神の歌に対して、須勢理毘売が酒杯を差し出ししながら引き停めようと歌った歌で、「栲衾・栲綱」が

…吾はもよ 女にしあれば 汝を置て 男は無し 汝を置て  
夫は無し 文垣の ふはやが下に 蠶衾 柔やが下に 栲衾  
さやぐが下に 沫雪の 若やる胸を 栲綱の 白き腕 素手抱  
き 手抱き拔がり…

と出ている。「栲衾」は「栲で作った夜具」で、たしかに「さやぐやと音のする下で」へと連なるのであるが、「万葉集」では、その色の白いところから「栲綱の」と同様「白山」「新羅」へとかかる

記紀歌謡に歌われたもの(二) — 植物を中心に — (中)

枕詞とされている。直前の「蠶衾 柔やが下に」は、「絹の夜具の柔らかな下で」の意味と思われる(「稷威言別」の「牟斯夫須麻」は虫被にて、蠶絹の衾を云なるべし。)に従ったし、勿論「万葉集」の

524 蒸衾なごやが下に臥したれど妹とし寝ねば肌し寒しも

を見ても分かるように、それは暖かな上等の夜具であったろうと思われる。それに対して、音のさやぐやとする点を対照的にあげたのが「栲衾 さやぐが下に」であってみれば、「さやぐや」の音が「さやか」や「さやけし」の意の「清らかな、すがすがしい」音として意識されていたに違いない。この歌の「栲綱の 白き腕」は3の歌と位置が違っているので、「あなたの(八千矛神)の白い腕で」と解される(「稷威言別」は「汝カ命の白き御手して」と解している)が、「古代歌謡全注釈吉事記編」の

沼河比売の歌と同様、「栲綱の 白き腕」も含めて、「そ擁き擁き拔がり」の目的語と見るべきであろう。

に従い、女性の白い腕と解したい。前稿で述べたように、6158の歌では、大根の白さが、女性の「白腕」へ連っていたが、「白さ」はやはり女性において尊ぶべきものであったようである。(つづく)